

第四十二回(令和四年度)

春日井市短詩型文学祭作品集

春日井市短詩型文学祭作品集

第四十二回(令和四年度)

春日井市
春日井市教育委員会
春日井市文化協会

もくじ

市長あいさつ 2

短歌 一般の部 3

小・中学生の部 7

審査員・実行委員作品 14

審査講評 15

俳句 一般の部 16

小・中学生の部 24

審査員・実行委員作品 32

審査講評 33

川柳 一般の部 34

小・中学生の部 39

審査員・実行委員作品 45

審査講評 46

狂俳 一般の部 47

審査員・実行委員作品 51

審査講評 52

詩 一般の部 53

小・中学生の部 61

審査員・実行委員作品 69

審査講評 72

審査員・実行委員名簿 73

ごあいさつ

市民の皆様のご支援をいただき、昭和五十六年から始まった春日井市短詩型文学祭は、本年で第四十二回を迎えました。今年も素晴らしい作品をお寄せいただきましたことに、厚くお礼申し上げます。今年は、一般の部の応募数は八百七十五点で過去最多となりました。市内で創作の輪が広がっていることを大変嬉しく思います。

短詩型文学は、限られた字数で心に残る経験や、自然の姿を表現する文芸です。応募作品を拝見しますと、物事に対する鋭敏な感覚や洞察力、情感豊かな表現に深い感動を覚えます。

これからも、世代を超えてより多くの皆様が短詩型文学に親しみ、この文学祭がますます実りあるものに発展することを願っております。

結びにあたり、作品の選考等にご尽力をいただきました実行委員及び審査員をはじめ、関係者の皆様方に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも、本市の文化振興に一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和五年一月

春日井市長 石黒直樹

短歌

一般の部

応募数	一四首
入選	三三首
特別賞	五首
秀逸	一首
佳作	一首

市議会議長賞

ねじ花の螺旋階段天に伸び
ふと祖父は生きていると思う

春日井市 望月 恵美

市長賞

春日井市 二村さだ子
朝顔に「怒っちゃいかんよ」と諭されて
夫の介護の一日はじまる

教育委員会賞

春日井市 山田 浩司
若き日に落とした物を取りに行く
空に登れよ高速道路

財団理事長賞

春日井市 鈴木 久代
母一人卒寿となりし終い家に
ドウダンツツジいよいよ咲けり

文化協会賞

春日井市 仁熊 文子
見下ろしの空地に観光バス五台
買ひ手待つ季をいよいよつた這ふ

春日井市 川島千枝子
 古い母は無沙汰の詫び状手にとりて
 タベもけさもひらき撫ずとふ

春日井市 女郎花

列車から見える弥勒の山の名を
 あの旅人はきつと知らない

春日井市 伊藤 孝子

幼子の注ぐ甘茶は誕生仏の
 地を指す手より落ちてゆきたり

春日井市 大橋 和華

たまかぜに呼ばれて集う幼顔
 風になつたら又遊ぼうね

春日井市 瀬尾 公彦

手をあげて机の上の消しかすを
 どうしましよと問う受験生

春日井市 田代 ふう

濡れて喜ぶ児を母親は見守れり

図書館の囲り早緑の雨

佳作

名古屋市 (市内勤務) 湯山 明美
 窓拭いて改めて見る今日の空二度とない空大切な空

春日井市 坂野 真理

百日紅しろがねの房べに紅の房いつもと違う並木路をゆく

春日井市 安藤 洋子

幾年も眠りし母の青き帯のれんに仕立て初夏を迎えぬ

春日井市 倉橋 昭子

悔いいくつ八十五年を胸におき「昭和歌謡」の輪に入りゆく

春日井市 戸澤三二子

おはなしの続きここにもありました遺影に語る夫一周忌

春日井市 林 保子

春落葉ひとり踏みゆく朝の道立ち止まり聞くうぐいす鳴くを

春日井市 神野祐紀雄
 目の手術終はり微睡む小半日
 ガーゼを透かす灯りに目覚む

春日井市 菱田 ユキ

君はいま若さの張りをしなわせて
 祖父の歩みに合わせ坂ゆく

春日井市 遠山 園生

未だ先と心と身体噛み合わせぬ
 ままに届きし後期高齢者証

春日井市 前宮 雅子

手をあわす一瞬うざいた夫への
 思い閉じ込め送る精霊

春日井市 加藤 侑江

子を育て夫を送りて来し方を
 知りたる櫛けいに別れをつける

春日井市 水谷 琴美
 草抜けば居場所なくした蟋蟀が暮れゆく庭を跳び交いており

春日井市 浦島 和美
 マスク下の我が微笑みに下校時の女兒はペコりと挨拶くるる

春日井市 松浦きぬ子
 我が青春学徒動員腕につけ玉音聴きぬ工場の庭

春日井市 望月 裕子
 旅立ちの時は萌黄の冬柿が四十九日経ち丹色に染まる

春日井市 加藤 初代
 中干しの意外に大きなひび割れが青田の奥へ縦横無尽に

春日井市 早瀬 薫
 令和なる今も変わらずラッパの音トーフとフと路地巡りくる

春日井市 児嶋 敦子
 店先の早生の林檎に目を惹かれ秋はじんわり我が裡に来る

春日井市 石川 静子
 裏山を走る列車の音絶えし美濃国分寺は亡き母の郷

春日井市 戸丸 優香
 飛行機の線路とにこり指をさす共に見上げる秋の空

春日井市 川島 信
菜園の主となりたるへちマ揺れ支への三杭かしがせてをり

小牧市（春日井高等学校）長尾 愛梨
来月で十八になる俺はまだ未成年を言い訳にグレル

小・中学生の部

応募数	四五七三首
入選	九一首
特別賞	五首
秀逸	九首
優秀	一〇首
佳作	六七首

市議会議長賞

松原中学校二年 松本 彩良
えんびつがノートや紙の上はしる
かきかえられぬものもあるんだ

市長賞

南城中学校二年 佐世 菜月
五年前あの子と寄った駄菓子屋の
ドアに店主の「閉店」の文字

教育委員会賞

高蔵寺中学校二年 杉浦 璃子
雨あがり足元の空透きとおる
私の映る青色の世界

財団理事長賞

南城中学校一年 平山 芽曖
そんな顔してたんだねと笑い合う
マスク顔しか知らないからね

文化協会賞

南城中学校三年 高松 舞海
盆休み不安の中の里帰り
マスク越しの「おかえりなさい」

味美中学校二年 山口 結子
息あわせ前へ前へと川くだる
オールにぎる手じんじんと赤く

北城小学校六年 伊藤 朱里
本読めば新世界へとひとつとび
心のとびらぶわつとひらく

石尾台中学校三年 堀場 洸也
もし君がどこか遠くに行こうとも
僕らは同じ空を見ている

不二小学校六年 川口日依彩
夏まつり気合いを入れてゆかたきて
きみの目にある花火を見てる

柏原中学校二年 小林くるみ
指揮棒が指す空の青息を吸う
しんと静まり音が始まる

味美中学校二年 松井 七愛
朝霧のかかる郡上の城の下
雨のおいが鼻をくすぐる

坂下中学校二年 馬淵 広誠
安堵する祖母への電話後ろでは
頑固な祖父の野太いうがい

南城中学校三年 大山ひより
春行きの列車に乗ったはずなのに
寝すごしたのか知らぬ間に夏

岩成台中学校二年 牧 聖名
シャボン玉小さな命われていく
自分が変わる一步前へと

小野小学校六年 花塚 勇智
義満もここを踏んだと思いはせ
噛みしめ歩むや金閣の道

神領小学校六年 奥村 心春
屋根の下ふとみあげるとつばめの巣
大きく育ち旅立つときかな

松原中学校二年 木和田琳音
夏の雪溶けてなくなるその前に
今日は何味私の気持ち

南城中学校二年 山元 涼雅
「後でやる！」やってないけど「もうやった！」
嘘をつく数多くなる夏

南城中学校三年 森 美月
君と会う時の予報は雨なので
傘を忘れる用意して寝る

南城中学校三年 有賀 悠真
水溜り水面にうつる向日葵が
「前を向けよ」と背中を押した

東部中学校二年 梶田理紗子
「帰ろうか」となりに座る君が言う
夕日は照らす世界のすみを

柏原小学校二年 雨宮 颯汰
おにぎりの中み何かな楽しみだ
明日はえん足晴れますように

南城中学校三年 清水 朝陽
青い空快晴の空見て思う
僕の悩みはちっぴけなのかな

南城中学校三年 三浦 理央
ひも結ぶ仲間と共にコートへと
最後の夏を噛みしめながら

佳作

知多中学校二年 大山 理凜
弟がマントを広げ目指すのは我が家のヒーロー父の姿だ

小野小学校四年 濱田明日望
昼下がりのちわを回す片うでがもうつかれたと悲鳴を上げる

中部中学校二年 掛谷 怜桜
このボール君に届けるまっすぐに思いを込めた熱い投球

高蔵寺中学校二年 渡辺 結希
立ち止まり話す友との帰り道短く思う夕焼けの時

中部中学校二年 藤原 安海
なないろの橋がかかればいつも思うアーチのスタートどこにあるかと

中部中学校二年 湯沢 悠生
テニス部の大会めざし猛練習サーブ百本入るまで打つ

中部中学校二年 大西 心菜
変顔を透明の板ごしにして笑わないのは心の壁か

西部中学校三年 伊藤 蒼空
お下がりに大喜びの弟の頭をなでるなんだかふいに

高座小学校六年 四本 隼颯
楽しみはサイクリングで山に行き峠を下る風受けるとき

神領小学校六年 下田十絢子
夕暮れに家族と共にベランダで空を見上げた楽しい七夕

山王小学校六年 辻 結衣
亡き祖父よ一瞬一時大切な思い出絶対忘れはしない

中央台小学校六年 小原 舞香
たのしみはカっぱいラケットをスパッと振り抜きボール打つ時

東部中学校二年 中島 美海
冬の朝たとえ寒くても「おはよう」と返してくれたあたたかい声

中部中学校二年 田中 咲菜
テスト開始手に汗握る緊張と教室包む秒針の音

中部中学校二年 長山 和香
相合傘雫の垂れて寄る肩に俯くわたし林檎のようだ

中部中学校二年 長谷川蓮果
風鈴は夏の合図を告げたのに秋の合図をもう待つ私

中部中学校二年 瀬田 匠瑛
ピーマンの苦さで記憶がよみがえる苦い思い出九才の恋

知多中学校二年 藤川 美咲
野良猫は見えぬ未来の旅をする小さな足で自由気ままに

松原中学校三年 梅村 隆斗
試合中勇気を出して攻め込んで思いつき打ち面ありの声

柏原中学校二年 樋住 真歩
パレットで水に溶け出るわたし色一心不乱筆を動かす

南城中学校二年 加藤那津美
何度でも君と時間を過ごしたい願いを一つ「またね」に乗せて

南城中学校三年 内海日花里
反抗期なぜかイライラ止まらないそんな自分に腹が立つんだ

石尾台中学校二年 坂本 あづ
自分よりあの子の名前を先に探すまわりの音はもう聞こえない

勝川小学校六年 張 慧子
たのしみは家族みんなでおおみそか321でジャンプする時

鷹来小学校六年 大溝 心蒼
木の葉から零れる光は天からの温かな優しい贈りもの

小野小学校四年 鳴瀬 良輔
朝の色肌で感じて空気にとけて泳ぐような心地かな

中部中学校二年 作石 悠陽
セミの声夏になったと気付く自分これから僕は何をしようか

中部中学校二年 稲毛 大喜
手をつなご問いかける君不意打たれ僕のほっぺは真っ赤に染まる

中部中学校二年 上野 優多
あと一点私だとれば勝てた試合涙ながらに笑う先輩

西部中学校二年 亀田 実愛
帰路につくため息をつき前をみたいつもの田んぼいつもの景色

西部中学校二年 高尾 颯太
ダンゴムシ体丸めて死んだふり尻を隠して頭も隠す

西部中学校二年 小出 結心
居た期間少なけれども忘れない自分を育てたふるさとの場所

西部中学校二年 小林 蓮
弟と喧嘩をするが次の日はすぐ仲直り不思議な力

坂下中学校二年 大代 薫奈
明日やる明日やるよと言う私逃げる私と追う夏課題

坂下中学校三年 土屋 涼花
振り向いた君が笑ったその一瞬時が止まったそんな気がした

高蔵寺中学校二年 松本 莉沙
今言いたい本当は言いたいがどう素直になれない14の私

「久しぶり」「やけたねすごく」登校日ありきたりでも嬉しい会話
高蔵寺中学校三年 シェンティールザラ

知多中学校一年 兒島 陸人
増していく未知なる知識一文字で賢くなれる前の「ぼく」より

知多中学校二年 黒木 優衣
珍しいアイスクリームきょうだいの笑顔の源ケンカの源

知多中学校二年 和田 陽雲
ダムダムとひびくドリブル目標へのぼっていくのは汗の階段

知多中学校二年 杉山 陸斗
カキーンとこの手に残る感触がああ練習を良き思い出に

松原中学校二年 宮田ひなの
「よーい、どんー」水にもぐって手をのばす応援の声大きく吸って

柏原中学校二年 松永 愛美
「ありがとう」そうささやいた先輩も涙がずっと止まらなかった

柏原中学校二年 桜井 拓夢
雨の中春大挑み泣き叫びグシャグシャになった白ユニフォーム

柏原中学校二年 荒川 真里
ズル休み食べたアイスはほろ苦くうしろめたさが舌に残りて

柏原中学校二年 水口 舞桜
寒い日に綿に埋もれるハムスターとでもかわいい天気予報士

柏原中学校三年 界 晴大
夏の海雲ひとつない晴れの日はまだで無限の藍玉のごとし

南城中学校一年 白井 花歩
夏になりスイカを食べて思い出す祖母が住んでる田舎のにおい

南城中学校一年 東 優里香
優しさはいろんな形あるからさどの優しさも全部1番

南城中学校一年 渡邊 葉月
駆け抜ける限界突破いざ挑戦勝利するのは自分自身だ

南城中学校一年 金原 実花
友達と真っ黒な空へ放たれる満開な花をじっと見つめて

南城中学校一年 加藤 新菜
ことわざの「ケンカするほど仲がいい」このときっと私達のこと

南城中学校一年 小林 恭大
庭にさくひまわりたちがうつむいたあと何へジ残るテキスト

南城中学校一年 小林 恭大
リーダーで近づいてくる赤い雲ベダルこぐ足力をこめる

南城中学校二年 日比野遥介
誰もいぬ家で食べるそうめんはなんだか味が薄く感じる

南城中学校二年 木村 颯真
夏の道はつんと落ちてる麦わら帽陽の光を受け一つ輝く

南城中学校三年 小林 琴羽
結果より過程が大事言い聞かす武道場とはこれでお別れ

南城中学校三年 飯島あかり
いつからかこの目に曇るもの何か淡い光に月夜に撃たれ

南城中学校三年 佐々木花夏
下校中ほんの少しだけ早歩き急かしているのはカレーのにおい

南城中学校三年 宮島 絢子
陸上部引退してから二週間靴下焼けが日々薄れてく

石尾台中学校二年 志賀 マデにこ
帰り道空に似合わぬうすい月信号の赤と晴天の青

石尾台中学校二年 林 亜季
学校に着いた頃には汗まみれ太陽お前働きすぎや

石尾台中学校二年 堀川 雄暉
遠い君見つめる僕に気づく君三秒間の僕らの世界

石尾台中学校二年 小川 千尋
絶対に良い点を取る次こそはそう誓うのは何回目だろう

石尾台中学校二年 二宮 紗和
コート上ピリつく空気でもだれもあきらめてないよ私達は勝つ

岩成台中学校二年 成瀬 愛華
広い空うっすら染める山吹の人の心も移りゆくとき

岩成台中学校三年 陰山 幹翔
回りだす扇風機の前陣取った占領するなど横に座った

小川 玲

庭に切る熊笹二尺に短冊を
つるせば細き茎しないたり

吉田美奈子

きららかに二月の光射し及び
川面に展く光琳のきん

清水 正人

くるぶしの影冴え冴えと蹴りながら
蹴りながら月の昇る窓まで

審査講評

〈一般の部〉

吉田美奈子

○朝顔に「怒っちゃいかんよ」と諭されて夫の介護の一日はじまる

介護はゴールの見えない馬拉ソン競技に喩えられる。たいせつな家族であっても、時には思いがけない口調になることもあるかもしれない。朝顔の花に諭された「怒っちゃいかんよ」という言葉は、作者自身の内なる声でもある。

○母一人卒寿となりし終い家にドウダンツツジいよいよ咲けり
子等が巢立ち、父を送った家に独り住む九十歳の母。いつかは取り壊すことになる家の庭にはドウダンツツジが咲きあふれている。母への思いと実家への懐かしさが感情を抑えて詠まれている。胸を打つ。

○ねじ花の螺旋階段天に伸びふと祖父は生きていると思う
ねじ花の薄紅の穂状花序が螺旋階段と捉えられ、無常と昇華を感じさせる。亡き祖父への哀惜の思いは、作者の心を天へと向かわせるのだ。下の句に実感がこもっている。

○若き日に落とした物を取りに行く空に登れよ高速道路
観念的な作品として鑑賞した。ここでは、落し物が何であったのかを問うのは不要であろう。高速道路を疾駆する高揚感が生き生きとした節調を呼び、むしろ明るくさえある。

○見下ろしの空地に観光バス五台買ひ待つ季をいよよつた這ふ
なかなか売れない観光バスに這う薦が、時の経過を物語っている。「五台」という具体がいかにもと思わせて効果的である。

〈小・中学生の部〉

○五年前あの子と寄った駄菓子屋のドアに店主の「閉店」の文字
コロナ禍による悲哀がここにもある。駄菓子屋という不思議な空間は子供たちの社交場でもあるのだが、それが閉店してしまふという寂しさ。「店主の文字」に、作者の確かなまなざしを感じた。

○そんな顔してたんだねと笑い合うマスク顔しか知らないからね
新型コロナウィルスが流行して三年、常にマスクを着けている生活を強いられている。しかし、作品はそれを弾き飛ばす明るさがある。口語を多用した屈託のなきが効いている。

○えんぴつがノートや紙の上はしるかきかえられぬものもあるんだ
ゲームなどではリセットを繰り返して無限に生き続けることができる。鉛筆で書いた文字もしかり。だが、この世には「かきかえられないものもある」ということに気付いた鋭さ。敢えて平仮名を使った下の句に、作者の思いを感じた。

○雨あがり足元の空透きとおる私の映る青色の世界
雨が上がったばかりの地面に水溜りが光っていたのだろう。ふと覗き込むと、そこには青空と作者自身が映っていて、まるで別世界に見えたのだ。発想の転換が興味深い作品。

○盆休み不安の中の里帰りマスク越しの「おかえりなさい」
ようやく帰省できた喜びとコロナ感染への不安が伝わってくる。「おかえりなさい」には万感の思いがこもっているように。

俳句

一般の部

応募数 三九三句
 入選 一一四句
 特別賞 五句
 秀逸 一九句
 佳作 九〇句

市議会議長賞

春日井市 野田 純子

棟上げの溢るる木の香涼新た

市長賞

春日井市 宮越三重子

教育委員会賞

春日井市 遠山 園生

マスクして笑いはみ出る寄席の春

末っ子も後期高齢桐一葉

財団理事長賞

春日井市 松川 正樹

文化協会賞

春日井市 山本ふき子

噛みしめる終戦の日のAランチ

盆経や父を語りし僧老いぬ

秀逸

春日井市 秋山 峯代

春日井市 小寺 朋子

咳込めばナース差し出す飴ひとつ

ふるさとの廃校照らす盆おどり

春日井市 菱田 ユキ

春日井市 中谷 佳代

骨折の夫に小鳥のくる窓辺

あくびする猫に牙あり冬の月

春日井市 松井かおり

春日井市 大津 久江

水鉄砲応戦しますわ風呂の陣

「シルクロード」流るる齒科の椅子涼し

春日井市 中野 方子

春日井市 裕福

アルバムを茶の間に広げ昭和の日

青田中野良着の人の仁王立ち

春日井市 仁熊 文子

春日井市 田本 雅子

夜振りすること小牧山城灯す

縫い上げを外せし吾子の星祭

春日井市 末永 富枝

春日井市 磯村 通子

入院も三回目なり秋更くる

藤の実や道風の夢追ひつづけ

冬うらら恐竜走るミュージアム

春日井市 尾崎 洋子

里の子ら案山子誘ってかくれんぼ

春日井市 稲垣 利夫

柿苗木植えて八年確と生く

春日井市 山元 收

住 作

鶯や小さな遮断機すぐ聞く

春日井市 木村満津子

雪かぶる地蔵に赤き手向花

春日井市 齋藤久美子

青葡萄マリアに祈る声小さし

春日井市 奥山ひろみ

月下美人ひらくいのちの揺れてをり

春日井市 松岡 準佑

朝まだきラインに母のお正月

春日井市 大山椒

農耕機の深き轍や薄氷

春日井市 吉田喜久子

走り梅雨葉裏にひそむ虫二匹

春日井市 安村美智子

緑り返し水面掠める朝燕

春日井市 吉田喜久子

銀杏散る日本ラインを浮き沈み

春日井市 秋山 峯代

ピアノ弾く子の指涼し駅広場

春日井市 奥山ひろみ

老二人声はずませて春見つけ

春日井市 裕福

紫陽花の百ある色に迷ひ切る

小牧市(たんぽぽ句会) 加藤みよ子

肩凝りやキリンは立つたまま日永

春日井市 目高

賑やかな横断歩道新学期

春日井市 山城屋博子

「イマジン」に二十歳の夏は背伸びして

春日井市 大山椒

落の灰汁染まる指先ATM

春日井市 磯村 通子

年玉や少年の手のやはらかし

春日井市 田代 ふう

影もまた踊る阿呆となつてをり

春日井市 西村 青夏

ふりむけば一人と思う秋深く

春日井市 岩田 万紀

幾千の魂燃ゆる曼珠沙華

春日井市 近藤 玲子

挨拶をかわせば吹けり春の風

春日井市 岩田 万紀

滑走路に自衛機帰還大西日

春日井市 奥村 昭子

縁台に薄活けつつ夜を待つ

春日井市 石川真紀子

楳や身の丈に合ふ年を経て

春日井市 大津 久江

姫百合咲く基地の重さよ半世紀

春日井市 長谷川みき子

待春や点滴棒を転がして

春日井市 山本 華蓉

春よ来い瓦礫の街のぬいぐるみ

春日井市 早川ひろみ

馬酔木あせび咲き廊下のきしみすりガラス
春日井市 松平千代子

おしゃれしてちょっとそこまで春の色
春日井市 堀田 悦子

牧場の匂ひなつかし花菜風
春日井市 矢羽田謙二

もぎたての水蜜桃の甘さかな
小牧市(市内勤務) 日榮 順子

白球を追うその先にひばり啼き
春日井市 金澤 正雄

まず一葉化粧初めし半夏生草
小牧市(市内勤務) 松岡 三雄

姫女苑の道賑やかに下校の子
瀬戸市(春日井市ミニテニス協会) 加藤三千子

父の日に酒一本の贈り物
春日井市 佐倉 宣子

涅槃西風老いの自覚日々新た
春日井市 加藤 健洋

七夕の願いは一つ世界の和
春日井市 足立 千春

余命あと如何に過ごさん草龍
春日井市 山口美佐子

ゆっくりと泳ぎ傘寿の岸ちかし
春日井市 菱田 ユキ

早世の夫は猫抱き夕端居
小牧市(たんぼ句会) 加藤みよ子

ペットボトル拾って夏トレシートまる
春日井市 今井 一兵

向日葵の迷路出口に母の笑顔かき
春日井市 今井 一兵

手術終え痛みに耐える夜長かな
春日井市 末永 富枝

散紅葉帽子に一葉山おりる
春日井市 鈴木 征津

マスク越し硬き笑顔と擦れ違う
春日井市 山城屋博子

葉桜の風のまにまに水の塔
春日井市 長谷川則子

紫陽花や老眼鏡で世を眺め
春日井市 山崎 泰右

囁りに心地良き朝の宮掃除
春日井市 加藤 昇子

縄飛びの縄にからまる春の風
春日井市 加藤 昇子

枝豆青くふるさとの山また青く
春日井市 西 天馬

剪定や脚立の脚の置き所
春日井市 長谷川弘代

古着屋の百年経たる麻暖簾
春日井市 野村 君子

柄に名前明治の母の白日傘
春日井市 野村 君子

願い込め一針一針吊し雛
春日井市 加藤 太一

梅干すや母のしわの手紅く染め
春日井市 白山シゲ子

夕立やワクチン後の気だるさよ
春日井市 白山シゲ子

墓参り瘦せた父の手坂の村
春日井市 小寺 朋子

コンビニの夜勤海月のごとくなり
春日井市 瀬尾 公彦

春うららネコに誘われゴロ寝する
春日井市 川松ひかり

シーソーの子ふたりと父薫風裡
春日井市 奥村 昭子

少年の指弾む夏駄ピアノ
春日井市 田中 由美

ベンガル語の飛び交ふ足場草いきれ
春日井市 福代 法子

殺伐とした世を嘆きチチ口鳴く
春日井市 真家実江子

言ひ出せぬ言葉一つや心太
春日井市 岩月万季代

雪降るやバス待つ人の足踏みす
春日井市 齋藤久美子

断捨離のもどして着るや衣更
春日井市 小林 純子

白虎隊の指さす城は炎暑かな
春日井市 青木 志津

みどり児の瞳に映ゆる柿若葉
春日井市 鈴木 道

布袋草祈りの色を咲かせおり
春日井市 戸根 由紀

終戦日身を整へて黙とうす
春日井市 浦島 和美

杖歩行の一步さきがけ春の蝶
春日井市 青山 孝子

明日は明日今日機嫌良くとろろ汁
春日井市 青山 孝子

丘陵の桃みずみずし水豊か
小牧市(市内勤務) 藤井 尚子

立春大吉潮満ち来る大鳥居
春日井市 岡崎くみ子

白髪の赤着るバレンタインデイ
春日井市 岡崎くみ子

煤払う居並ぶ僧侶善光寺
春日井市 三浦 順子

たまらなく人恋しさや月見草
春日井市 稲垣 嘉子

秋暑しいつもアルトの明け烏
春日井市 川瀬千栄子

リハビリの杖のリズムや春の雨
春日井市 川瀬 光夫

大根干す二間足らずの車庫の軒
春日井市 駒澤満すみ

背をまるめふかす紫煙といわし雲
春日井市 ばばれいこ

お土産で春日井アイス渡される
春日井市 岩間 法子

樺太は帰れぬ母郷冬の月
春日井市 友郎

秋麗画布にも高き空の青
春日井市 小林 良子

草むしりモーセの如き老夫かな
春日井市 福助

迎え火や上がりかまちにトイブードル
春日井市 浅賀 品子

青空にひとすじに咲く桜かな
春日井市 優美

白髪の母の散髪萩の風
春日井市 藤居 真弓

添い寝して十を十回羊雲
春日井市 田本 雅子

登校の声や三日で夏休み
春日井市 中谷 佳代

床緑磨く人あり実相院
春日井市 牧野 勝彦

密蔵院いくど野分を数へたる
春日井市 石原 伸生

領海の闇轟かし冬の雷
春日井市 友郎

小・中学生の部

応募数	一三三	四一	句
入選	一一	一六	句
内特別賞	五	句	
秀逸	一二	句	
優秀	一三	句	
佳作	八六	句	

市議会議長賞

高森台中学校一年 山口 華澄

夏空をひこうき雲が切り分ける

市長賞

大手小学校六年 石原 奏多

教育委員会賞

松山小学校四年 市川のぞみ

夏空を吸い取っていたビルのまど

初日の出きれいな朝をありがとう

財団理事長賞

柏原中学校三年 後藤 和奏

文化協会賞

松原中学校一年 成田彩花里

引き継いだホルンは重し雲の峰

ソーダ水やっと終わったテスト期間

秀逸

味美中学校三年 稲葉 せり

味美小学校六年 及川 結理

繰り返しポストをのぞく年賀状

木もれ日が日がさに写る登下校

南城中学校二年 安永 翔

南城中学校三年 神谷 流星

温暖化声もちりぢり蝉の声

大人へと一歩近づくサングラス

丸田小学校五年 山田 幸咲

小野小学校六年 星屋 伯楽

夏山よ闇夜で気づく連帯感

ころんでも運動会はとまらない

柏原小学校四年 内藤 理友

藤山台小学校四年 小田桐 誉

ケローナに桜と書の美伝えよう

甲虫みつのとりあい本気出す

味美小学校六年 山崎 美緒

玉川小学校三年 加藤 結衣

ツバメの巣うちにつくって家族みたい

はじめてのプールドキドキがんばるぞ

柏原小学校三年 杉原 康介

松原小学校六年 遠山 太晴

まっつたよ学校プールさいこうだ

現実だ終わり近づく夏休み

高座小学校五年 齊藤 璃美
さみしいなどもだちほしくりすます

東部中学校二年 木下 陽翔
水の無き稲穂の揺れる田んぼ道

高座小学校五年 新家 颯月
更衣こんな服ってあったっけ

高蔵寺中学校一年 田中 咲羽
水たまりうつる虹橋とびこえて

坂下中学校三年 白石 穰
葉桜の隙間にのぞく青い空

勝川小学校六年 森谷 万優
風ですら重たい夏の帰り道

石尾台中学校三年 山口 廉晴
炎昼や静けし車道こぐペダル

東部中学校三年 杉浦 聡
燕の子寄りて鳴き待つ帰路の親

藤山台小学校三年 田邊 葵
かき氷シャリツとサクツと山くずし

小野小学校六年 佐藤 彩結
ビー玉をのぞけば反転雪景色

上条小学校六年 折金 彩葉
おどろいたお向けのせみうごき出す

山王小学校四年 星野 裕
川の中蟹の背中がわらってる

山王小学校六年 大野有紗美
雪だるま少しの間のお友だち

勝川小学校五年 廣瀬 稀衣
一本道ほなでられる春風に

不二小学校六年 今井美桜里
鮮やかに心も染まるアロハシャツ

篠木小学校六年 加藤 寛祐
ペダルこぐ夕立を背に急ぐ僕

山王小学校五年 母良田琉奈
登校日本から聞こえる夏の声

山山小学校二年 伊藤 舜
シャリシャリと音もたのしいかき氷

柏原小学校六年 山田ありす
宿題は「後でやるから」かき氷

牛山小学校四年 西山 桃禾
日やけ顔一人もない出校日

松山小学校五年 岡本 侑也
葉を見ればしづくがキラリミニトマト

鳥居松小学校一年 中野 結花
ひまわりがたねいっぱいでおじぎする

北城小学校五年 高田琳太郎
ぼう持って右左すいかわり

鳥居松小学校三年 百濟 玲央
はじめての海水浴は塩の味

丸田小学校三年 田川 詩
あさがおはらっぱみたいな形だね

燦々と煌めく宝なすびかな
西部中学校一年 野村 誉

梅雨明けの太陽写る水たまり
坂下中学校三年 長門 妃音

ゆかた着て背すじ心も大人びる
藤山台中学校一年 塚原 百迦

背伸びして朝日に向かうつくしの子
松原中学校三年 榎 敢聖

夏の海まるで大きな宝箱
柏原中学校三年 界 晴大

妹と並んで飛ばす石鹼玉
柏原中学校三年 青木美沙音

ゆれる灯に祖父の声聴く盆提灯
南城中学校二年 大島 美森

カラカラと音で楽しむ氷水
南城中学校三年 加藤 愛乃

風呂上がり酒豪のように飲む麦茶
南城中学校三年 白田 一朗

門出の日おどる桜が出むかえる
味美小学校五年 今西 悠惺

水面や月光道と船明り
味美小学校五年 緒方 健大

かけたいなレモンシロップ夏の空
勝川小学校四年 中村 吏伽

筆の花風に吹かれて揺れる様
勝川小学校五年 井上 咲

花びらを拾って帰りプレゼント
勝川小学校五年 齋藤 桧那

もっこりしほっこりしたよ八重桜
勝川小学校五年 八木直太朗

負けないぞセミより元気に遊んじゃえ
鷹来小学校五年 井田 艶花

宿題の応えんソングはせみの声
牛山小学校六年 坂井 優斗

かき氷指がおどるよどれにする
小野小学校四年 野村 一加

トントントン梅雨は屋根にノックする
小野小学校六年 武田 一花

思い出す桜の花と君のこと
小野小学校六年 横井 桃香

清明の心ゆさぶる青い空
小野小学校六年 長谷川千晴

かきごおりしたをみせあいわらいあう
八幡小学校三年 唐木 彩歌

セミの声母さんよりもうるさいな
高座小学校五年 谷口 太一

くもりぞら弟と追うちょうにひき
山王小学校四年 奥田 漣斗

ドンドンッと想像花火空に咲く
山王小学校五年 川口 紗代

しろくまさん親はこわいよ子はかわいい
高森台小学校四年 前田 琉那

ひまわりが上をむいたよいい天気
柏原小学校二年 福水 柊

歩くたびセミの合唱しき者気分
柏原小学校四年 大平 颯真

天の川無数の星が帯のよう
大手小学校六年 千場 莉子

きめポーズしろつめぐさの王かんて
中央台小学校二年 近藤 瑠香

ツバメの子餌を求めて親を待つ
中央台小学校五年 前田 優

犬も見る琥珀にそまる夕焼けを
岩成台西小学校五年 森田 茉莉

腰抜かすいつしか高く向日葵が
松山小学校五年 石黒煌乃丞

夏祭り家族みんなでみてまわる
松山小学校五年 山浦 紫愛

夏まつりちょうちんの中火がゆれる
上条小学校三年 澤井 愛花

登下校せみがなっている会議かな
上条小学校六年 澤井 柚花

上条小学校六年 清水 優歌
いいにおい夏のあかつきたまご焼

神屋小学校六年 奥村 悟
夜桜よ水面に写り別世界

北城小学校六年 吉久 陸斗
そよかぜとついできたのは春の音

北城小学校六年 辻 心日奈
桜咲き心の花も咲きはじめ

北城小学校六年 安藤 緋咲
虫の声林の中の子守り唄

北城小学校六年 山本倫太郎
道の端色鮮やかな紫陽花よ

押沢台小学校三年 桑原 快
丸々と去年のたねのすいかかな

丸田小学校六年 酒井 亮輔
立ち並ぶひまわりたちの背比べ

丸田小学校六年 鹿内 美瑛
風鳴けば共鳴しだす風鈴が

東部中学校三年 清水 璃咲
若鮎や川にささるは矢のごとく

東部中学校三年 金子ひより
窓際に余韻がのこる体育祭

東部中学校三年 渡部 紗夕
夏の空帰る子供の濡髪よ

西部中学校三年 田村 空楽
水平線空へ飛び出す鯨の背

高蔵寺中学校一年 後藤 優美
急ぎ足天より落つる雷火かな

高蔵寺中学校三年 北 柚紀
盆休み三年ぶりの祖父の顔

高蔵寺中学校三年 中西 唯
木漏れ日の涼風の中子守唄

高蔵寺中学校三年 井上 京哉
微風とアイスコーヒー共にして

知多中学校三年 佐藤みほ子
紫陽花の水面の空になびく髪

知多中学校三年 神戸 美緒
霜柱足が地面を咀嚼する

松原中学校一年 山口 隼采
青き空白雲走る入学式

松原中学校一年 水谷 瑠陽
河川敷頭つき出すつくしんぼ

松原中学校三年 松岡 羽玖
帰り道君への思い積乱雲

柏原中学校三年 田中 心音
夕立と静かに刻む掛け時計

柏原中学校三年 小坂 瞭介
桜散る緑道沿いのベンチかな

柏原中学校三年 甲斐 樹
夜小道風乗り響く祭りの音

味美中学校一年 柴山 瑠埜
青がえる葉から葉へと飛びうつる

味美中学校三年 佐藤 舞奈
右足をすでに蚊たちはお気に入り

南城中学校一年 永瀬 雫
稲光して兄弟で丸くなり

南城中学校一年 佐藤 梨央
とどきそうブランコの上って入道雲

南城中学校一年 富田 芽華
ながめてるラムネびんごしの片思い

南城中学校一年 細江 陵介
炎熱で悲鳴をあげたチョコレート

南城中学校一年 坂元 瑛樂
夏部活しぼれる服に自信つけ

南城中学校二年 谷川明日香
2年越しみんなが集う墓参り

南城中学校三年 末永 結一
道はたをそつと見守る雪だるま

南城中学校三年 小林 眞尋
夏祭り足を踏み入れ別世界

われ先に遡上の鮭や打たれたる

永井 光代

青芝ややうやう馴染む終の家

松浦 洋子

出前来てゐる昼時の追儼寺

田口 風子

審査講評

〈一般の部〉

永井 光代

○マスクして笑いはみ出る寄席の春
新春の寄席の落語において、思いきり爆笑してマスクからはみ出た縁起の良い一句。従来としては「マスク」と「春」は季重なりとなる。只今コロナ禍により「マスク」は使える様になりました。

○嘸みしめる終戦の日のAランチ
上五の「嘸みしめる」が物の無い時代を痛切に感じさせる。味わいは一入であった。

○棟上げの溢るる木の香涼新た
朝から槌の音のひびき、木の香の漂う空気に包まれて、棟上げがはじまり、次々と骨組みが出来て、縁起の良い日です。

○末っ子も後期高齢桐一葉
健やかなご家族であり、お幸せでございます。桐の一葉も、一葉ずつ光線に当たりながらゆっくりと温順であります。

○盆経や父を語りし僧老いぬ
盆経は、宗派によっても異なりますが、お盆に住職が、それぞれ戸別に伺い棚経を誦経する。その後で故人の思い出を語りながら、歳月と共に僧は老いぬ。

〈小・中学生の部〉

○夏空を吸い取っていたピルのまど
現在のピルの構造は、ガラス張りの窓が多く見受けられる。外側からピルを眺めて、眩しさの中に夏空がガラスの枠ごとに

映っていた状態を「吸い取っていた」とした表現が写実的であった。

○引き継いだホルンは重し雲の峰
中学に入り、部活動には吹奏楽の管楽器の編成に部員も多く、その中で念願であるホルンに決め、やっと引継いだホルンに触れた瞬間に意外に「重し」と感じた。校舎の窓から遥かに入道雲が湧き立っていた。頑張る意欲が出た。

○夏空をひこうき雲が切り分ける
夏の青空に高度により音は聞こえないが、一点の動きに、視線が入り、飛行機雲が段々と太くなり、青空が切り分けられて行く現象でよく気がつきました。

○初日の出がきれいな朝をありがとう
初日の出が見られてよかったね。なかなか見られるとはかぎりません。感謝をこめて言えた事がすばらしい。

○ソーダ水やと終わったテスト期間
テストの期間もやと終えて胸を撫で下ろした。安堵感にひたり、ソーダ水を存分に飲み干した。



一般の部

応募数 二三九句
入選 六八句
特別賞 五句
秀逸 一六句
佳作 四七句

市議会議長賞

雪舞えば妻の遺影にシヨール巻く
春日井市 近藤 玲子

市長賞

乗り越えた試練を糧につかむ夢
春日井市 原 真寿美

教育委員会賞

長生きをして見えてくる青い鳥
春日井市 西村 青夏

財団理事長賞

涙拭きその手で開ける明日のドア
春日井市 松浦 照子

文化協会賞

赤貧の暮らしを包む親の愛
春日井市 岡本千恵子

秀逸

鏡の中のふとした仕草母がいる
春日井市 田口えい子

ビー玉に映る逆さの信号機
春日井市 塚原 咲羽

荷を下ろし余生楽しむ時間割り

春日井市 白井 元子

あのねから孫の魔法の伝書鳩

春日井市 石垣 康允

病んで知る笑顔の妻の温かさ

春日井市 近藤 洋輔

ぎすぎすとした世に耐える欠け茶碗

春日井市 松井八重子

トス上げて繋がる気持ち轟かせ

知多市(春日井高等特別支援学校) 山田 義大

不気味だな今は戦前かも知れぬ

春日井市 今井 陽子

大鍋の要らぬ食卓古い二人

春日井市 長谷川みき子

麦の穂で平和の味を噛みしめる

春日井市 水野かよ子

花も実も終えて安堵のこぼれ種

春日井市 川松ひかり

病む地球両手で癒し子につなぐ

春日井市 黒川 睦子

眼差しで守られ育つ子の自信

春日井市 小久保千鳥

愛架ける七色の橋消えぬ間に

春日井市 谷本 淑江

尾張旭市（南部ふれあいセンター川柳クラブ）加藤 美子
後期の樹根っこは未だ伸びたがる

見回してマスクを外す登り坂

春日井市 菱田 ユキ

理不尽に消えゆく命負の歴史

春日井市 小原 順子

小牧市（年金者組合春日井支部川柳サークル）余語 佳代

捨てられぬ思い出だけは宝箱

春日井市 若尾 彩

素っぴんをマスクで隠し街に出る

春日井市 吉田喜久子

明日より一日若い今日生きる

ポケ防止に一役担う好奇心

春日井市 坂野うた子

校庭から始業チャイムに砂煙

春日井市 佐倉 宣子

佳作

おはようは心に昇る朝日です

春日井市 戸澤三二子

いつか咲く花だと信じ水をやる

春日井市 浦島 和美

ぬくぬくと育つ子供の塩加減

春日井市 長縄 典子

果てるまで命の塔を研ぎ澄ます

春日井市 小林和喜子

コロナ禍が社会の仕組み変えて行く

春日井市 山本 英之

妻曰くあなたは何時も黙秘する

春日井市 山田 浩司

終活に身が入らない老い元氣

春日井市 松岡 準備

生き過ぎと思えど予約するドック

春日井市 神野祐紀雄

入院し友のラインで涙ぐむ

春日井市 樫原かず子

氣負わずに風に乗りたい系とんぼ

春日井市 尾崎 洋子

郵便受けチラシの多寡で世相知り

春日井市 伊藤千代子

五月晴れ平和の空に鯉泳ぐ

春日井市 高橋 愛子

嬉しいね善意のラリー続く人

春日井市 梅尾 芳香

米寿すぎまだまだ意欲かけりなし

名古屋市（かすがい川柳会）岩月 照

思い切り笑ってみたい明日の僕

春日井市 長縄 光男

これからも背筋をのばす心意氣

春日井市 長谷川利夫

車椅子押して指図を受けており

春日井市 渡辺 洋子

大鍋にちよこんと煮物二人分

春日井市 中野 方子

音痴でも歌好き歌で涙消す

春日井市 浅賀 品子

妻と行く山の畑が行楽地

春日井市 堀田 真澄

俺よりも先に逝くなよ心から

春日井市 平井 正雄

侵攻が核の脅威を浮き彫りに

春日井市 原 敏文

何時からか立つも座るもどっこいしよ

春日井市 山城屋博子

もういいかなワクワクン打った四回目
春日井市 東 敦盛

生け花に愚痴ひとつ置き今日も生き
春日井市 岡島 律枝

年重ね笑う分だけ幸せに
春日井市 辻井 文子

甲子園球児の未来無限大
春日井市 山元 收

温暖化青い地球に危機迫る
春日井市 春田はるか

年の差をいいわけにして恋おわる
春日井市 倉橋 昭子

かわいさは天使のごとしねむるねこ
春日井市 西谷 寿

雷鳴よブーチンさんにお仕置きを
春日井市 足立 千春

餡パンの臍に指入れうふふふ
春日井市 磯村 通子

昼下がリラインピコピコ寝て既読
春日井市 松田 昭子

あま酒の今も忘れぬ祖母の味
春日井市 瀬瀬チヅ子

包まれてまた包まれて新生児
春日井市 平永きよみ

伸びし背のみらいに願う明るい世
春日井市 加藤美奈子

ロス断つと値引き食品なじみ客
春日井市 長通 征也

今だけは悪女でいたい虹の端
春日井市 小池 君代

背広着て危険な暑さ叫ぶ人
春日井市 岡部 睦夫

この香り蚊取線香祖母の家
春日井市 みと満寿美

介護してはじめて父のおもい知る
春日井市 神 潤子

小・中学生の部

応募数 三九四〇句
入選 八〇句
内 特別賞 五句
秀逸 九句
優秀 九句
佳作 五七句

市議会議長賞

流れ星宇宙がくれた夢希望
篠木小学校六年 河内 陽音

市長賞

信頼し信頼されて友できる
篠木小学校六年 松尾 菜緒

教育委員会賞

成績を渡してみると石の母
南城中学校三年 中川 柚葉

財団理事長賞

雨の日はつまらないけど音はすき
上条小学校四年 今井 菜乃

文化協会賞

弟とけんかするほどなががい
小野小学校三年 前橋 悠平

味美小学校六年 武友 雄弥
失敗はやりなおせるよ何度でも

大手小学校三年 石原 音々
友だちのメガネにうつるあかね色

中部大学春日丘中学校一年 吉田 咲斗
あの校舎友と机がよみがえる

西尾小学校六年 落合 伶朱
ゲーム中画面に見える母の顔

高座小学校二年 松本 紗菜
おいしいなじみのやさいありがとう

篠木小学校五年 中川 千聖
マスク焼けコロナを防ぐ勳章だ

南城中学校一年 山本 大成

父の日に少し照れてる僕がいる

石尾台小学校一年 佐藤 優衣
おじぎそうちよんとちくつとかわいいな

中部大学春日丘中学校三年 佐藤 海月
ウェブ授業何故かマスクをはずせない

優秀

不二小学校五年 阿部 佑音
今どきのトレンド顔はマスク顔

高森台小学校二年 兒玉 莉央
おかしいなわたしのうではくいしんぼ

松原小学校六年 坂野 真叶
池の中炎をつくる赤いコイ

松原中学校三年 近藤 知晃
生きる意味考えるより探したい

味美小学校六年 岡 さくら
逢いたいと言えずにスマホ握りしめ

小野小学校三年 石原 陽葵
ありがとう言葉一つでうれしいな

中部大学春日丘中学校二年 今井 日菜
夢のため努力ができる君が好き

南城中学校一年 菅原 有一
試合の日おにぎりの中カツがある

石尾台小学校六年 原山 心菜

水あそびぼくもまぜてとセミの声

佳作

篠木小学校六年 岩島 芽生
チクタクと踊る針達待つ私

鳥居松小学校一年 吉村 剛
おてつだいみっかぼうずでママなげく

小野小学校六年 奥山 桃加
いつかまた大きな声で笑いたい

石尾台小学校四年 橋本侑香里
はずみだす明日の気持ちかがやいて

中部大学春日丘中学校一年 河内 佳穂
メモしてもその存在を忘れてる

新しいノートの始めきれいな字
高見湖々乃

母の日に日頃の愛をプレゼント
西尾小学校六年 諸井希乃美

黒板がきれいになって笑ってる
不二小学校五年 松岡 咲綾

なみだはね恥じゃなくてねほこりだよ
藤山台中学校一年 松井 杏奈

久しぶりそう言い笑う祖父の顔
南城中学校二年 加藤 日和

入院中恋しくなった母の味
南城中学校三年 伊野波南美

一通のライン一つで目が踊る
中部大学春日丘中学校一年 藤井 怜

おばあちゃん手から感じる温かさ
南城中学校二年 坂本 三藍

お友達合わせ鏡で増やそうよ
高蔵寺中学校一年 西川 史織

絶望のテスト返しがまっている
不二小学校五年 神取 れい

ぼくたちは未来を創る宝物
山王小学校五年 中西 皇絢

父の日を父の言葉で思い出す
東部中学校一年 越智菜々美

ダイエットお腹へこまず気がへこむ
中部大学春日丘中学校一年 山口 ゆめ

あつい夏みつけたかげにしゃがみこむ
石尾台小学校六年 藤田 優奈

テスト点みせた瞬間鬼の顔
東部中学校一年 財津 美侑

教科書を開くとすぐに夢の中
高森台中学校三年 道上 夏帆

たんじょう日年に一回自分の日
篠木小学校六年 森田 珠央

たくましい燃える心ありがとう
神領小学校四年 永草 湊都

仲直り気持ちスッキリ軽くなる
柏原小学校五年 加藤 圭斗

太陽に負けない元気どどけるよ
石尾台小学校四年 白木愛莉咲

サボテンのきしめん食べて癖になる
坂下中学校一年 小池 美心

努力の実咲かせるまでが真の価値
松原中学校三年 梅本奈於美

部活後の帰る速さはカタツムリ
南城中学校二年 永江 陽翔

お手伝いいくらやっても次がくる
石尾台中学校一年 梶田 昊夢

一歩ずつ突き進むのが亀の道
中部大学春日丘中学校一年 原田 汰知

参考書買って満足未開封
中部大学春日丘中学校二年 木全 来翔

僕と君性別なんて気にしない
高座小学校五年 池上 涼香

おにごっこすぐにつかまる先生だ
篠原小学校三年 今井 暁登

お風呂場でひとり楽しくコンサート
南城中学校三年 兒島 由奈

甲子園球児の想い届く夏
味美小学校六年 松岡 大樹

学ランにへんしん兄はジュケンセイ
牛山小学校二年 伊藤 夏央

下校中ぼくの頭は夜ご飯
小野小学校五年 杉林 奏哉

あめのおとざあざあびちおんがくたい
北城小学校一年 伊藤 初葵

宇宙より遠いところに宿題が
南城中学校二年 島岡利久那

暑い日に熱い涙で引退だ
南城中学校三年 神戸 大駕

ふと思う強くやさしい母偉大
南城中学校三年 小屋敷愛菜

南城中学校三年 木村 智寛
スライダーチャレンジしたぞ俺大人

東部中学校三年 窪田奈々花
夏休みまだかまだかと予定表

南城中学校三年 藤井いろは
大きな手お父さんって大きいな

南城中学校二年 梅本 結愛
夏休み今日は一体何曜日

岩成台中学校三年 志賀 彩乃
今日もまた机に向かいにらめっこ

南城中学校二年 吉田 美結
インスタを閉じては開くもう癖た

中部大学春日丘中学校二年 張 語宸
母の背中見るたび思うありがとう

南城中学校二年 岩崎 悠花
久々の祖父母の家で野菜取り

坂下中学校二年 水草 琉斗
一人でもマスク外すの忘れてる

南城中学校三年 加来 琉奈
「ドスドス」と登る足音これは父

藤山台中学校一年 高崎 友実
食事中命をもらうありがたみ

中部大学春日丘中学校一年 礒川 翼
久しぶりマスクとったら違う人

南城中学校一年 五味 翼
踊らずに友と雑談益踊り

篠木小学校四年 星野 実咲
まんが家のゆめに向かってさあ走ろう

東部中学校一年 長屋 藍大
今この時目標照らし歩む時

審査員・実行委員作品

重徳 光州

苦も楽も従容として受け入れる

原 雄一郎

着地した半歩メダルの色を決め

大脇 一荘

プライドを守り通した決算書

戸田富士夫

風になる訳にはいかぬ恩がある

原 雄一郎

長引くコロナ禍、不安定な世界情勢、生活不安の物価高となつている今、この伝統ある春日井市短詩型文学祭を通じて、明るく夢のある明日へ歩いて行きましょう。

〈一般の部〉

今年の川柳の応募総数は二三九句でした。

市長賞

○乗り越えた試練を糧につかむ夢

原 真寿美

人生にはいくつもの試練があり、それを乗り越えてこそ夢がつかめます。

財団理事長賞

○涙拭きその手で開ける明日のドア

松浦 照子

辛い事、悲しい事があり涙する日もありますが、めげずに歩き出しましょう。

市議会議長賞

○雪舞えば妻の遺影にシヨール巻く

近藤 玲子

深深と冷えた夜、外は雪が舞っていた。寒かろうとそっと遺影にシヨールをかけてみる。

教育委員会賞

○長生きをして見えてくる青い鳥

西村 青夏

高齢化社会ではあるが、長く生きれば訪れて来る幸せも多くあります。

文化協会賞

○赤貧の暮らしを包む親の愛

岡本千恵子

子供が思っているより、はるかに親は子供を心配しています。

〈小・中学生の部〉

応募総数は三九四〇句で昨年より増えています。

予備審査をありがとうございました。

市長賞

○信頼し信頼されて友できる

松尾 菜緒

心から信頼できる友達がいることは、本当に幸せなことです。

財団理事長賞

○雨の日はつまらないけど音は好き

今井 菜乃

雨の音は、何となく物悲しくまたロマンチックですね。

市議会議長賞

○流れ星宇宙がくれた夢希望

河内 陽音

流れ星を見つけた時、願い事をすればその願いが叶うと言われています。

教育委員会賞

○成績を渡してみると石の母

中川 柚葉

お母さんは、成績を見て一瞬固まったけど、あなたの事は大好きです。

文化協会賞

○弟とけんかするほどなががい

前橋 悠平

いつも兄弟けんかをしていても、本当は弟の事が大好きだよ。



一般の部

応募数	一一〇句
入選	四三句
特別賞	五句
秀逸	一一句
佳作	二七句

市議会議長賞

春日井市 浦島 和美

吊し柿

マンションの軒下染める

市長賞

春日井市 春田はるか

教育委員会賞

春日井市 三浦 守

吊し柿

風物詩郷愁誘う

吊し柿

村中がオレンジ染まる

財団理事長賞

犬山市 (楽教の会) 大川 宝香

文化協会賞

春日井市 稲垣 千代

生き甲斐

タレ染み込んだ鰻食う

吊し柿

山裾の小屋赤く染む

秀逸

生き甲斐
実りを待ちて種を蒔く

春日井市 浦島 和美

生き甲斐
英語学んでハワイ行く

春日井市 西谷 寿

吊し柿
藁家の軒に豊願う

春日井市 花野 紀花

吊し柿
頬ばる母の顔浮かぶ

春日井市 小久保千鳥

軒先借りて赤くなる

春日井市 馬場 豊子

生き甲斐
孫の成長靴を買う

春日井市 小久保千鳥

生き甲斐
手品で慰問拍手受く

春日井市 春田 正宏

俳一筋に没頭す

春日井市 春田はるか

ちぎり絵に晩年歩む

春日井市 花野 紀花

命の水と爺は言う

春日井市 三浦 守

仕事と趣味に日々励む

春日井市 稲垣 千代

佳作

吊し柿
髭面がぬっと出てくる

春日井市 松川 正樹

吊し柿
おいしくなれと声かける

春日井市 尾崎 洋子

御嶽望み陽に映える

春日井市 春田 政樹

生き甲斐
満足そうな顔を見る

春日井市 谷中 ゆい

生き甲斐
テニスボールを追いかける

春日井市 河合 美穂

今日のこと家族と語る

春日井市 加藤美奈子

吊し柿
通行人も愛でて行く

春日井市 神野祐紀雄

吊し柿
凝縮された甘さ待つ

春日井市 みと満寿美

生き甲斐
好きな趣味に没頭する

春日井市 中野 方子

生き甲斐
時ゆったりと流れ行く

春日井市 武山 明彦

吊し柿
しわしわの手で皮を剥く

春日井市 加藤 初代

生き甲斐
週に一度は未だ泳ぐ

春日井市 菱田 ユキ

生き甲斐

娘の子またオムツ替え

春日井市 トモコ・ポーロ

吊し柿

口をあけつつ下で待つ

春日井市 ばばれいこ

次回予告に胸おどる

春日井市 長谷川海青

錦秋の軒端に映える

春日井市 林 真人

妻母祖母を演じきる

春日井市 小原 順子

生き甲斐

心豊かに日々暮らす

春日井市 谷口 景子

家庭菜園収穫す

春日井市 三浦 桂純

青い鳥探し続ける

春日井市 大沢 正義

吊し柿

ふるさと想い食べたいな

春日井市 馬場 安子

旅の計画胸はずむ

春日井市 浅賀 品子

祖父の背中に音符書く

春日井市 小池 君代

吊し柿

父の手作り最高だ

春日井市 田本 雅子

生き甲斐

詩吟一筋飽きもせず

春日井市 笹山 時子

並ぶ暖簾が甘さ増す

春日井市 井上 清美

==== 審査員・実行委員作品 ====

吊し柿

郷の風物風情ある

磯部 美帆

吊し柿

軒すだれして夕陽吸う

近藤 古城

生き甲斐

好きで打ち込む狂俳がある

生き甲斐

母は我が子に夢賭ける

井上 喜楽

吊し柿

美濃路紀行は風情ある

生き甲斐

土と組余生楽しむ

磯部 美帆

○吊し柿 風物詩郷愁誘う

正に鄙の風物詩。遠く離れた古里、ご両親への想いが強く感じ取れます。

○生き甲斐 タレ染み込んだ鰻食う

ワウ美味しそう、毎日頑張った、ご自分へのご褒美かな。

お疲れ様です。此れからも益々お元気で。

○吊し柿 マンシヨンの軒下染める

軒のある家が少なくマンシヨンが多く立ち並びます。

その中に有ってベランダかな？洗濯物の片隅に、五、六本？

何とも言えぬ、郷愁と哀愁を感じました。

○吊し柿 村中がオレンジ染まる

豪雪白川郷かな、軒並みに、きつと美味しく、甘く大事な保存食。

存食。

○吊し柿 山裾の小屋赤く染む

たわわに生った渋柿。都会の孫、娘にとせせと皮を剥き小屋一杯に。親心が嬉しいですね。

「吊し柿」

食べ物が豊富で、即、手に入る時代ですから、昨今はほとんど見られなくなりました。その分若い皆さまには、難題だった様な気がします。猛省致しております。

狂俳はお題が有り、題から何かを説明では無く連想、描写、一幅の絵に成る様に、僅か十二文字で作句する、漢字止めは不可、必ず動詞、又は形容詞で止める、題との共字は不可、と約

束事が多い文芸です。

約二八〇年と言う長い歴史が有りながら年々衰退して・・・

春日井句座一社となってしまいました。

若い皆さんのお力で、伝統のある短詩文芸狂俳を引き継いで

頂ける事、心より念じております。



一般の部

応募数 一九編
入選 一〇編
特別賞 五編
秀逸 二編
佳作 三編

市長賞

小さきものと生きる

春日井市 加藤 初代

庭の草取りをした

ジョウビタキがチツチツと呟いて寄って来た

「変わらない？一人暮らしは慣れたかい」

「うん まあね エサはあるかね？」

ご飯粒をまいたが忙しそうに頭を振りながら行ってしまった

黒い帽子に茶色のコートが似合っていた

畑の土起こしをした

セキレイが耕した土をつつきながら寄って来た

「変わらない？耕運機うまくなったね」

「うん まあね エサはあるかな？」

長い尻尾を揺らしながらツツと仲間のところへ行ってしまつた

この世は小さな生きもので溢れている

一人の夕餉は何にしよう

小さめの大根とほうれん草を抜いて井戸水で洗っている

と 電線にカラスが一羽とまってじっとこちらを見ていた

「いつまでそこにいるの？みんな帰つたよ」

カラスは一声鳴いて夕日に向かって飛んで行つた

くましくみえた

この世には一人ぼっちの生きものがいる

えらく若い夫の写真の前で、テレビのニュースを見ながら夕食をとる

今日も世界の紛争を伝えている

この世には人と人との争いが溢れている

北へ帰つた鳥たちよ

大陸では砲弾の音が聞こえるか？

来年来るときは教えておくれ

広大な地が静かになっていったって

人が人らしく 小さな生きものが安穩に生きてい

るって

夜 外に出てみた
白い月が少し雲に隠れていた

財団理事長賞

呼ぶ声

春日井市

小林 飛水

雪ははげしく降りつづける
あとから あとから ふりつづける
空のかなたから 灰色の小さな生き物が
地上めざし急ぎ落ちてくる
なにかを積んだところには
ふんわり丸く小さな丘をつくり
丸く丸くふくらませて
小さな流れをそっと渡る
春はしようじょうばかまが咲く流れ
栗の枝は雪をのせ
風花を飛ばし 空に白いけむり
あのふくらみは「山の神」の祠

とても遠くまで来てしまった
帰り道は真っ白のふくらみのなかに消えて
どう行けば家につくのか
吹きつける風の中から
よしこ 道はこっちだよ
姉の呼ぶ声

ちちははも姉も逝き
暁闇の寝覚め
遠くから姉の呼ぶ声
よしこ こっちだよ

市議会議長賞

雲の影

春日井市

尾崎 洋子

雲の影が 渡ってゆく
小学校の運動場
いくつもの小さな目は 見上げる
公園の小さな池

教育委員会賞

休日の脳

春日井市

山田 浩司

私の大切なもの でもそれはあなたの無関心なもの
あなたの大切なもの でもそれは私の興味のないもの
考えもしなかったそんなこと
自分本位な私
おっと 本日の課題が脳内をめぐる

雲の影は私を捕えた
畑仕事の手を止め見上げる
首筋を風がすうっと通り過ぎる
おもむろに雲の影は私を解放した
残された私は一人立ちつくす
やがて消えゆくであろう私の影と

ひたひたと夕暮れが近づいてくる
そして密やかに星の輝きが増してゆく

一瞬 真面目に考えて
答えは今日もでない
酒を飲んでも
散歩をしても
崩壊した私の思考は
何を欲しているのか
本などを読み漁っているのだが
一向に解決不能である
テレビを見ても
ドラドラと過ごす休日である
お金は無いのである
ものすごく平和である

小さなお菓子の世界

春日井市

ばばれいこ

ガラスケースの向こう
 香りを漂わせながら
 整列している クリスタル
 どれも選ばれたくて
 艶めきながら近づくの
 苦いのはお好き
 甘い蜜がいいかしら
 生姜のネックレスなんて
 めずらしくていいでしょ
 一緒に琥珀の美酒はいかが
 まだ早いわよ
 お花畑の中でそよ風に当たりましたよ
 フランボワーズの波くぐり
 バニラのクッション 倒れ込むの
 飾りじゃないの チョコレート
 リードしますよ ワルツでね
 フルーツピアスにレモンのワンピース
 ピクニック気分よ 公園で
 抹茶たてる やまとなでしこ
 ココナッツミルクも入れましょう

オレンジパティシエ 自由に操る
 カスタードクリーム
 あなたが一番 誰かしら
 レースのディッシュ たった一つ
 座れるのはあなただけ
 胸の高鳴り ため息一つ
 スパイシーな熱い目で
 見つめないで
 端に座っているあなた
 みんなに囲まれ幸せね
 そうよ みんな兄弟ですもの
 化粧もおしゃれもニガテなの
 悩みを聞くのは得意だわ
 ありがとう あなたにするわ
 シュークリーム
 やっぱり今日も よろしくね

Sound of Silence

春日井市

足立 哲朗

明け方 ベッドで目を閉じたまま耳を澄ます
 小さく ゴオオン ゴオオン ゴオオン
 一番電車が往く
 ジイーン ジイーン ジイーン
 これが静寂しじまの音なのか
 ドクツ ドクツ ドクツ
 心臓の鼓動がしじまのなかで大きく響く
 スーウ スーウ スーウ
 かそけき鼻息だな これは
 心臓の鼓動は一日十万回とか
 肺呼吸は一日三万回とも
 みな一時も休まず仕事をしてくれているのか
 ありがたいことなんだ

でも おかしいな
 二番電車の音はいつまでたっても聞こえない
 まだ夢のなかなんだろうか

南吉つつあんへの手紙

名古屋市(市内勤務) 林

夏子

拝啓

今年も暑い夏でした
 先日、双子の娘達は十八歳となりました
 世の中、もう成人です

私の小三の頃の夢は
 〴〵いいお母さん〴〵でした

南吉先生の物語のような
 〴〵優しいお母さん〴〵になりたくて

でも、全然 全然ダメです

日常と感情に流されて

キツネのかわいいお手で
うっとりしている牛
でんでん虫の背負うもの
子どもと共に健やかに
願いを胸に歩みます
燈 胸に一歩ずつ

その瞳、声色、髪の色、
肌荒れの痒み
ちやんとみえているかしら
子ども、みえているかしら

お空の南吉様を見上げて
ちっばけな私の憧憬

新美南吉様

敬具

佳作

五月

春日井市 望月 裕子

お日さまが
あんまり明るいから
目が覚めてしまったんです
空があんまり
青いから
起きてしまったんです
夏が光と一緒に
やってきて
私を野原に
連れて行くとうるんです

逃亡

名古屋市(市内勤務) 天方 巴在

走った。
いま、ここから逃れる為に。
あの角までは走り続けよう。
思いの外、角までが遠くて、
辿り着けない。
後ろを見るのが怖くて、
追いつかれそうので、
走り続ける。
まだ走り続ける。
いつまでも走り続ける。
左膝が痛いけれど、
走り続ける。
頭の中では「ロッキー」のテーマ曲が流
れている。
その曲に唆されて、走り続ける。
「雀の子 そのけそこのけ お馬が通る」*
家の庭から犬が吠える。
「やーい、そこから出て来れないだろう。」
と叫び、走り続ける。

*小林一茶「おらが春」

御時勢

春日井市 谷澤りつ子

「わたしは誰れ」
「それは、あなたでしょ」
そんなはずはない
ただ、浮遊してるだけ
同士相憐れむかのように
持て余す時間に足もとも覚束無い
「そう、わたしは高齢者」
高齢者カードを戴いて
百円で乗れる黄色のバスに乗る
心もとなない寂しさと欲の闘ぎあい
頼りにしてます墓参り
お馴染さんも乗ってます
話を聞けば免許返還の人もあり
胸に悲哀を秘めながら
微妙に背が泣いている
黄色のバスは有り難い
四季折々の景色を眺めをり
二〇二二年の歩を合す
待つ身の辛さもあるけれど

これもご時勢と言ひ聞かす
社会福祉の有り難さ
昭和、平成、令和と生きてます

小・中学生の部

応募数	二八六編
入選	一四編
特別賞	五編
秀逸	二編
優秀作	三編
佳作	四編

何をはなしているのだろう

ここは子どものいないふしぎな世界

光の中をよこ切ると

私の心はわくわくしていた

それとどうじにこわくなった

しばらくすると光がきえた

ゆめからさめてさみしくなった

私が大人になったとき

私はどこにいるのだろう

市長賞

夜のドライブ

柏原小学校三年

松岡 由珠

長くつづくくらい道をぬけると
パアッと光の世界が広がった

高いビルやお店はきらきらしていて
夜なのに朝みたい

まどのむこうの人びとは
楽しそうに歩いている

おしゃれをした女の人たちがわらっていた

財団理事長賞

私らしさ

石尾台中学校三年

溝手 理子

私はシャボン玉になりたい
プカプカときれいな色で
どこまでもとんでゆく

私はシャボン玉のように
私の色で
夢に向かって
どこまでもとんでゆく

私は海になりたい
世界の光をちりばめて
さらに明るくする

私はあなただの声のように
暖かくつつみこみ
思いを音にのせる

私はあなたの声になりたい
春の風のようにあたたかく
思いを音にのせてゆく

私はなりたい私でいる
それがきつと
私らしさ

私はなりたい私でいたい
でも、私は

シャボン玉にも
海にも

あなたの声にも
なることができない

だから

市議会議長賞

ぼくはコクワガタ

白山小学校二年

奥田 千輝

クスギの木のかわのうらで
うとうとしていたら
きゆうにかわをはがされて
木からおちちゃった
あおむけになってじたばたしていたら
黄みどりのあみがかぶさって
青色のかごにいれられた
しばらくかごの中にいたけれど
その後とうめいのケースにいどうした
ここには木のえだもはっぱもあって
いがいとおちつけるから
とりあえずねることにした
よるおきてみたら
赤いプルプルしたのを見つけた
いいにおいがしたからたべてみたら
なかなかうまい
おうちにもどりたい気もちもあるけれど
ここの生かさも
わるくないかも

教育委員会賞

金魚すくい

東野小学校四年

堀 結愛

おまつりはこわい
みんなぼくたちをねらってる
たくさんの人があつまって
みんなぼくたちをねらってる
あかいろのふちのうすいかみ
それでぼくたちをすくうんだ
だからみんないなくなる
ぼくもとられていなくなる「こわい」
だけど君はやさしくて
ちゃんと世話をしてくれた
長生きしよう君のために
長生きしようぼくのために

空蝉

鳥居松小学校六年

奥田 千葵

五年、六年、待ちつづけ
 やっと地上に出られる時
 仲間にさよならした後
 出口に向かつてはい出たら
 辺り一面美しい景色
 太陽、車、人、土の中とは全くちがう
 てくてく歩き
 木を高く高くのぼる
 木にしがみつき
 まだかまだかとじっと待つ
 力を込めベリッと一皮むけたら
 さあ飛び立つ時だ
 未来へはばたけ
 ぼくの命

筆

白山小学校五年

奥田 虹香

ぼくの家族を紹介します
 半紙母さん
 失敗もやさしく受け止めてくれる
 墨汁父さん
 頑張れよって背中を押してくれる
 文ちゃんおばあちゃん
 いつでも静かにお母さんを支えてる
 すずりおじいちゃん
 頑固だからちよっと苦手なんだよね
 下じきお兄ちゃん
 たよりになる縁の下の力持ち
 妹の小筆
 細かい仕事はバトンタッチ

あの日見たニュース

石尾台中学校一年

阿部 結愛

あ、あの子が来た！
 今日はどんな作品ができるかな？

マワリミチ

東部中学校二年

猿田 愛夏

足を止める
 交差点の信号機
 見慣れた田んぼ道
 今日はいつもと違うことがしたい
 見慣れた道に背を向ける
 目的地は変えない

さっきも見た入道雲
 うるさいくらの蝉の声
 変わったのは道だけ
 なのにいつもと違う気がする

電球式の信号機が見える
 次は右に行こう

私はある日 ニュースを見た
 たくさんの人が苦しんで 助けを求めているような
 そんなニュースだった
 画面いっぱい 焼け野原が広がって みんなが向こう
 を見ていた 泣いている人 魂が抜けたみたいに立っ
 ている人 周り全体が 暗く 未来がないような そ
 んな雰囲気だった
 私は 動揺した 怖くて 恐ろしくて 思わず目を閉じ
 て 耳も思いつきり塞いだ なにも聞こえないように
 気付いたら 体は震えていて 息も上がっていた も
 のすごく怖かった
 夜 布団に入って 目を閉じたとき さっき見た ニュ
 ースの 内容 映像 が頭の中で再生された 怖くて
 恐ろしくて なかなか寝れなかった もう二度と
 あんな ニュース 見たくない そう強く 願った

真っ赤なルビーを見た

石尾台中学校一年

矢島 沙紀

わたしはたくさん遊んだ
宿題なんてほっぽり出して
橋に通りがかったとき
なぜか分からないけど
わたしは目をつむった
おそろおそろ目を少しずつあけると
真っ赤なルビーのようなものが
わたしの目にとびこんできた
川が真っ赤なルビーを見てきらきらと
かがやかせながらこうぶんしている
わたしも目をきらきらとかがやかせながら
こうつぶやいた
明日はきつと晴れ

見つめるひまわり

高森台小学校五年

長尾 楓花

私が好きな 花言葉
あなただけを見つめる
太陽のようにかがやくひまわり
夏になるとかがやくひまわり
空にむかってぐんぐんのびる
ひまわりをみると元気がでる
私もひまわりのように
かがやきたいな
君を私が見つめるように
君はひまわりのように
かがやいている

佳作

虫よけスプレー

白山小学校三年

尾関 飛人

虫がちかよらないようにするスプレー
「虫よけスプレー」
セミも虫
セミもいなくなると思ったから
スプレーしないで
セミとりに行った
セミはとれずに
たくさん「か」にさされた

いろんな時代を見てきたの

どの時代が好きだった？

話ができたらいいのにな

名前も知らない大きな木

雨

石尾台中学校一年

後藤ひなた

教室の窓を見てみると 天気は大雨
地面がぬれる 草木もぬれる
まるでシャワーの水をあびてるように
たくさん雨が降っている

名前も知らない大きな木

東部中学校二年

黒川 紗希

名前も知らない大きな木

私は何人も入れそうな大きな木

きつと何百年もここにいて

雨にうんざりしている自分がある

だけど天気は変えられない

そう思い ため息をつく 自分でも長いと思うぐらい長

いため息を

雨が降る中 歩きだす
ぬれた地面の上を歩く
いつも歩く道は ぬれているけれど なぜか私は
かさもささないで 少し歌いながら
「雨でも喜ぶ人はいるんだ。」
この言葉を信じ 軽い足取りで
また歩きだした

夏

岩成台中学校三年 佐藤 春菜

夏はあつい 今年もあつい
セミはミンミン 地面はジリジリ
風鈴はチリンチリン 太陽はサンサン
あつい あつい あつい
セミは鳴き続ける 短い青春にのせて
短い命で泣き続ける
地面は湧き上がる 陽炎が揺れる
太陽の熱を浴びて
風鈴は揺れる 風に力を借り
涼しさを届けてくれる
太陽は輝く 私達へ光を届けてくれる

いつまでも照らし続ける

夏 夏 感じる
ひまわりは笑い 海は踊り 花火が咲く
青黄赤緑 色が映える
人が笑い 自然も笑う とても綺麗だ
ああ 幸せだ

透き通る青空 入道雲
キラ キラ キラ 夏 夏 夏
さあ 来年の夏も暑いかな

審査員・実行委員作品

春榆と水仙

椎野 満代

ともだちに
なれそうな椅子に
出会ったから
もうさまざまはしない
草原に
水辺に
おおきなハルニレの樹の下に
つれていく

木漏れ日がきらめく
静かな時間がながれている
少年と椅子の
それは共有できる

居場所
ココロの畔

話すことなどなにもない
この世の言葉はさわがしく
混乱や矛盾や誤解をうむ

広大な原野
一本のハルニレの樹が
陰をおとして
少年を包んでいる

だれもこない
ひっそりした冬の日
白いスイセンの花がそこに
野生化して
少年の
居場所を少しずつ
あかるくふやしている

約束

麦の種をまく秋には
昔の人がゆかしく思われる
はるかな大空の懐に愛する者の面影を
見ることができた歌の時代の人たち⁽¹⁾

振り仰いで空を見るどんな人にも
ひとつの約束が交わされる
もはやここにはいない愛する者に
再び会えるよすがの所在を告げて

そのように私たちも
昔の人をまねて空を仰ぎたい
この空は時代を超え場所を超えて広がる
大津波の後のトウホクにも
平原と麦畑の広がるウクライナにも
ささやかな放心であれ悼むべき悲嘆であれ
平凡な日常の外にかざす指の隙間にせめて
青い大空の約束を探し当てられたなら
想ってみる
父を母を、亡くすことを想ってみる
恋人を、妻を夫を、亡くすことを想ってみる

山崎 広光

子を孫を、亡くすことを想ってみる
友を、兄弟姉妹を、亡くすことを想ってみる

いずれ失うことになるのなら
仲良くなることには何のいいこともない
誰だって王子さまと同じ気持ちになるだろう
だがキツネは言った
「いや、ある。麦ばたけの色が、あるからね」⁽²⁾
麦畑の色
王子さまの髪の毛の色
私たちとの約束を包んで広がる大空

(1) 「大空は恋しき人の形見かは物思ふことにながめらるらむ」
『古今集』酒井人真
(2) サンIIテグジュペリ『星の王子さま』
(内藤濯訳、岩波少年文庫)

つぼみ

わたしに触わらないでください
わたし たぶんもう咲けない

だからこのままの形状^{かたち}でいる
このまま 乾いていく

灰いろに
石になる

メドゥーサに睨まれて*
人並みに「はな」になれなかったから
人並みにひらひらと
散ることも萎れることも枯れることも
しない

このまま 硬くなる
鈍いろに

雌薬も雄薬もまるごと鎖して
「はな」になるつもりだった記憶も

だから触わらないでください
未練^{うまづみ}に水など替えないでください
もう咲かない
って、決めたの。

里中 智沙

*メドゥーサ
ギリシア神話に登場する怪物。見た者を石に変える力を持つ

山崎 広光

日常の平凡な情景や出来事に何か深いものを感じとること。

また、小中学生にとっては、未来への期待や不安という現在の心情。それらは詩の出発点になるでしょう。様々な作品に触れ、詩を書くことで、自由な感性を育ててほしいと思います。

〈一般の部〉

「小さきものと生きる」は祈りの詩でしょうか。この世には多くの小さなものが生きている。その気づきが、小さなものたち（と人間と）の平穏な生活を願うことへとつながります。最終二行のやや不安を孕んだ静けさがいいですね。

「呼ぶ声」は、夢の中の雪の情景描写が美しい詩です。その中に作者の人生が描かれています。特に後半で「こっちだよ」という亡き姉の声が、たんに夢の中の事柄であるだけでなく、現世の向こう側といったものを暗示しているようです。

「雲の影」では、何か大きな自然の移ろいを雲の影が象徴しています。その移ろいの下に万物はある。そのことを作者は見つめています。三連の「やがて消えゆくであろう私の影」が、作品に深みを与え、また作者の死生観もうかがわれます。

「休日の脳」。やや破綻も見られますが、少し破天荒な面白い作品です。切実な課題に直面して答えが出ない。それも人生の真実でしょうし、そんな自分を外から見ている。最終二行のややほろ苦いユーモアのある自画像には共感できます。

「小さなお菓子の世界」も楽しい作品です。作者の声と、そ

れぞれのお菓子の声とが、（少し無雑作ながら）響きあっています。ショーケースの中でお菓子たちが今にも踊りだしそう。作者だけでなく、読者もその中に引き込まれそうです。

〈小・中学生の部〉

「夜のドライブ」。思春期の子の感じ方をこの年代の作者が、と少し驚きました。子どもから大人への成長を、暗い道から輝く街への夜のドライブにたとえています。期待と不安と。

「私らしさ」も、自分自身の成長への願いを描いています。美しいイメージと、そのイメージの手前に私らしさを求めるというつつましい願いが、読者には好感がもてます。

「ぼくはコクワガタ」。コクワガタの立場になりきって、虫捕りのようすを微細に描いています。こう感じてほしいという作者の思いを移し入れているのが、ほほえましい。

「金魚すくい」も金魚になりきった作品です。だからこそ、「こわい」側面、人間の都合だけで美化されてはならない部分も、ちゃんと捉えている。優しさがそれを包んでいます。

「空蟬」。題名に少し難点がありますが、蟬の脱皮と、未来へはばたこうとする作者とを、ともに命の動きとして重ね合わせています。最終行には命の熱さを感じます。

第42回春日井市短詩型文学祭 審査員・実行委員名簿

区 分	氏 名	所 属	実行委員	審査員
市	水 田 博 和	教育長	○	
文化協会	山 本 博	文化協会会長	○	
学校	北 原 千 穂	西尾小学校校長	○	
短歌	小 川 玲	林間短歌会／塔短歌会	○	○
	吉 田 美奈子	コスモス短歌会	○	○
	清 水 正 人	水甕		○
俳句	梅 村 半 醒	俳人協会(獺祭)	○	○
	永 井 光 代	中部日本俳句作家会(南風)	○	○
	松 浦 洋 子	俳人協会(笹)	○	○
	田 口 風 子	俳人協会(若竹)	○	○
川柳	重 徳 光 州	名古屋番傘川柳会		○
	原 雄一郎	名古屋川柳社		○
	大 脇 一 荘	中日川柳会	○	○
	戸 田 富士夫	中日川柳会	○	
狂俳	磯 部 美 帆	春日井狂俳壇	○	○
	井 上 喜 楽	春日井狂俳壇	○	
	近 藤 古 城	東の華吟社		○
詩	椎 野 満 代	日本現代詩人会	○	○
	山 崎 広 光	日本現代詩人会	○	○
	里 中 智 沙	日本現代詩人会	○	○

第43回春日井市短詩型文学祭

令和5年5月中旬頃～作品募集開始予定！

あなたも、短詩型文学祭に参加してみませんか？

はじめての方も大歓迎です。

春日井市に在住・在勤・在学している方、

または春日井市内のグループに所属し、

活動している方はどなたでもご応募できます。

ハガキの他、下記のQRコードを読み取り、
スマートフォン・タブレットからのご応募いただけます。

※募集開始は令和5年5月中旬を予定しています。



令和五年一月発行

編集 公益財団法人かすがい市民文化財団

〒四八六―〇八四四

春日井市鳥居松町五―四四

電話（〇五六八）八五―六八六八

発行 春日井市